

	九州大学 工学分野
学部等の教育研究 組織の名称	工学部（第1年次:804） 芸術工学部（第1年次:202） 大学院人間環境学府（M:95 D:40） 大学院システム生命科学府（D:54） 大学院工学府（M:379 D:120） 大学院システム情報科学府（M:140 D:45） 大学院総合理工学府（M:164 D:60） 大学院芸術工学府（M:120 D:30） 大学院統合新領域学府（M:61 D:14） 応用力学研究所 先導物質化学研究所 情報基盤研究開発センター
沿 革	明治44（1911）年 九州帝国大学工科大学創立 大正8（1919）年 九州帝国大学工科大学は、九州帝国大学工学部となる 昭和14（1939）年 久留米高等工業学校創立 昭和17（1942）年 九州帝国大学流体工学研究所設置 昭和18（1943）年 九州帝国大学弾性工学研究所設置 昭和19（1944）年 九州帝国大学木材研究所設置 昭和24（1949）年 新制九州大学工学部設置 昭和24（1949）年 九州大学生産科学研究所設置 昭和26（1951）年 九州大学応用力学研究所設置 昭和28（1953）年 九州大学大学院工学研究科設置 昭和37（1962）年 九州大学中央計数施設設置 昭和43（1968）年 九州芸術工科大学芸術工学部設置 昭和44（1969）年 九州大学大型計算機センター設置 昭和52（1977）年 九州芸術工科大学大学院芸術工学研究科設置 昭和54（1979）年 九州大学大学院総合理工学研究科設置 昭和62（1987）年 九州大学機能物質科学研究所設置 平成5（1993）年 九州大学有機化学基礎研究センター設置 平成8（1996）年 九州大学大学院システム情報科学研究科設置 平成10（1998）年 九州大学大学院人間環境学研究科設置 平成12（2000）年 九州大学学府・研究院制度創設 平成12（2000）年 九州大学大学院人間環境学府設置

	<p>平成12（2000）年 九州大学大学院工学府設置</p> <p>平成12（2000）年 九州大学大学院システム情報科学府設置</p> <p>平成12（2000）年 九州大学大学院総合理工学府設置</p> <p>平成12（2000）年 九州大学情報基盤センター設置</p> <p>平成15（2003）年 九州大学大学院システム生命科学府設置</p> <p>平成15（2003）年 九州大学機能物質科学研究所と九州大学有機化学基礎研究センターとを融合・再編成して、九州大学先導物質化学研究所を設置</p> <p>平成15（2003）年 九州大学と九州芸術工科大学が統合され、九州大学芸術工学部、大学院芸術工学府設置</p> <p>平成19（2007）年 九州大学情報基盤研究開発センター設置</p> <p>平成21（2009）年 九州大学大学院統合新領域学府設置</p> <p>平成22（2010）年 応用力学研究所、先導物質化学研究所、情報基盤研究開発センターが共同利用・共同研究拠点に認定</p>
<p>設置目的等</p>	<p>明治44年、国家の須要に応ずる学術技芸を教授し及びその蘊奥を攻究することを目的として、九州帝国大学工科大学が創立された。</p> <p>大正8年、九州帝国大学工科大学は、九州帝国大学工学部となる。</p> <p>昭和14年、九州大学工学部・芸術工学部・工学府・システム情報科学府・総合理工学府・芸術工学府の母体の一つである久留米高等工業学校は、高等の学術技芸を教授することを目的として設置された。</p> <p>昭和17年、流体に関する工学の学理ならびにその応用の研究を目的として九州帝国大学流体工学研究所が設立された。</p> <p>昭和18年、弾性工学に関する学理及びその応用の研究を目的として九州帝国大学弾性工学研究所が設立された。</p> <p>昭和19年、木材に関する学理及びその応用の研究を目的として九州帝国大学木材研究所が設置された。</p> <p>昭和24年、新制国立大学の発足時には、久留米高等工業学校、九州帝国大学工学部は、九州大学工学部として承継された。</p> <p>昭和24年、産業開発に関連する工学の基礎的及び応用研究を行い、わが国生産科学の発展に寄与することを目的として、九州大学生産科学研究所が設置された。</p> <p>昭和26年、力学に関する学理及びその応用の研究を目的として、流体工学研究所及び弾性工学研究所が母体となり九州大学応用力学研究所が設置された。</p> <p>昭和28年、工学に関する学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的に、九州大学工学研究科が設置された。</p>

昭和37年、研究者の需要に応じて計数資料の作成、提供にあたりとともに、計数に関する研究を行うことを目的として、九州大学中央計数施設が設置された。

昭和43年、「技術の人間化」を理念とし、技術を人間生活に利用するために、科学と芸術とを統合し、技術の進路を計画し、その機能の設計について研究するとともに、人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする設計家を組織的に養成することを目的に、九州芸術工科大学が創立された。

昭和44年、大型計算機を管理運営するとともにその整備を図り大学の教員その他の者の学術研究等の共同利用に供すること並びにコンピュータの高度利用に関する研究及び開発を目的として、九州大学大型計算機センターが設置された。

昭和52年、学部における一般的並びに専門的教育を基礎として、芸術工学に関する高度の理論及び応用を教授研究し、指導的役割をはたしうる総合的な設計家を組織的に養成することを目的として、九州芸術工科大学大学院芸術工学研究科が設置された。

昭和54年、物質・エネルギー・情報を三本柱として、学際的分野の研究教育を行うことを目的に、九州大学大学院総合理工学研究科が設置された。

昭和62年、新しい機能性物質創製・開発とその利用システムに関する研究を目的として、九州大学機能物質科学研究所が設置された。

平成5年、有機化学の反応、構造、物性、分子システム化に関する基礎的研究を目的として、九州大学有機化学基礎研究センターが設置された。

平成8年、情報科学及び電気電子工学の新領域を切り開き発展させる能力をもつ研究者及び広い視野をもつ高度専門職業人を組織的に養成することを目的に、九州大学大学院システム情報科学研究科が設置された。

平成10年、地球規模で複雑に多様化する傾向にある人間環境を取りまく諸問題を多面的視点から科学的に解明し、人間にとって最適な環境の在り方とその創造の方向を探り、新時代の共生社会をリードする役割を果たす人材を組織的に養成することを目的に、九州大学大学院人間環境学研究科が設置された。

平成12年、大学院の教育研究組織である「研究科」を、大学院の教育組織としての「学府」と教員の所属する研究組織である「研究院」とに分離し、相互の柔軟な連携を図ることを目的として、九州大学学府・研究院制度を創設した。

平成12年、九州大学大学院人間環境学研究科を改組し、九州大学大学院人間環境学府が設置された。

平成12年、教育研究を通してエネルギー・資源・物質・環境・システムに関する深い専門知識と探求創造能力を教授育成するとともに、高い倫理感と国際性をもって工学に携わる研究者・技術者・教育者を組織的に養成することを目的に、九州大学大学院工学府が設置された。

平成12年、幅広い知的関心、国際性、倫理性を持ち、かつ情報科学及び電気電子工学の分野で高度な専門的知識と研究開発能力を備えた次世代の研究者・技術者・教育者を組織的に養成することを目的に、九州大学大学院システム情報科学府が設置された。

平成12年、物質、エネルギー、環境及びその融合分野における環境共生型科学技術に関する高度の専門知識と課題探求・解決能力を持ち、持続発展社会の構築のためにグローバルに活躍できる技術者や研究者となる人材を組織的に養成することを目的に、九州大学大学院総合理工学府が設置された。

平成12年、研究、教育等に係る情報化を推進するための実践的調査研究、基盤となる設備等の整備及び提供その他専門的業務を行うことを目的として、九州大学情報基盤センターを設置した。

平成15年、生物学、情報科学、工学、医学、農学の諸分野を横断的に融合した学際的な教育研究を行い、社会の多様な要求に堪えうる独創性と柔軟性に富み、情報科学と生命科学、又は工学と生命科学という二つの領域に精通したダブルメジャーの素養を持つ先端的研究者・教育者、ならびに、高度な能力と学識を備え社会の広い分野で活躍する高度な専門職業人を組織的に養成することを目的に、九州大学大学院システム生命科学府が設置された。

平成15年、物質化学における先導的研究で世界最高水準の成果を上げ、「物質化学」の国際的中核拠点を形成することを目的として、機能物質科学研究所及び有機化学基礎研究センターが母体となり九州大学先導物質化学研究所が設置された。

平成15年、九州大学と九州芸術工科大学が統合され、技術を人間生活に適切に利用するために、技術の基礎である科学と人間精神の最も自由な発現である芸術とを総合し、技術の進路を計画し、その機能の設計について研究するとともに、人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする設計家を組織的に養成することを目的に、九州大学芸術工学部が設置された。

平成15年、九州大学と九州芸術工科大学が統合され、技術を人間生活に適切に利用するために、技術の基盤である科学と人間精神の最も自由な発現である芸術とを統合し、技術の進路を計画し、その機能の設計について研究するとともに、人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする高次の設計家を組織的に養成することを目的に、九州大学大学院芸術工学府が設置された。

	<p>平成19年、従来の研究、教育等に係る情報化を推進するための実践的調査研究、基盤となる設備等の整備及び提供その他専門的業務に加え、情報基盤に係るシステム開発を行うことを目的として、九州大学情報基盤研究開発センターを設置した。</p> <p>平成21年、科学的な知の統合と創造を通じて、現代の科学や社会が問いかける複合的かつ根源的な課題の究明に取り組み、その知的成果を社会に還元するとともに、自らそのような知の担い手として活躍する高度な専門人材を組織的に養成することを目的に、九州大学大学院統合新領域学府が設置された。</p> <p>平成22年、応用力学研究所が、社会・学界の要請する応用力学に関する研究課題に対して、力学の学理を応用した共同利用・共同研究により、当該研究領域の学術的な進展と成果を社会に還元することを目的として、共同利用・共同研究拠点（応用力学共同研究拠点）として認定された。</p> <p>平成22年、先導物質化学研究所が、物質・デバイス領域で多様な先端的・学際的共同研究を推進することを目的に、ネットワーク型共同利用・共同研究拠点（物質・デバイス領域共同研究拠点）として認定された。</p> <p>平成22年、大規模数値計算・データ処理・ネットワーク分野のグランドチャレンジ的学際共同研究を推進し、学術的研究発展に貢献すると共に、我が国の学術・研究基盤の更なる高度化と恒常的な発展に資することを目的に、情報基盤研究開発センターがネットワーク型共同利用・共同研究拠点（学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点）として認定された。</p>
<p>強みや特色、社会的な役割</p>	<p>九州大学においては、自律的に改革を続け、教育の質を国際的に保証するとともに、常に未来の課題に挑戦する活力に満ちた最高水準の研究教育拠点となることを基本理念としており、以下の強みや特色、社会的な役割を有している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 我が国を代表する拠点大学として、倫理観、課題探究・解決能力、確かな知識を有する創造性豊かな高度な技術者の育成の役割を充実するとともに、独創性、国際性、俯瞰性に富み、広く社会で活躍できる高度な研究能力を有する先導的な人材育成の役割を充実する。 ○ 九州大学が先駆けて導入した「学府・研究院」制度などを活用して、伝統的な基礎学問分野はもとより、工学分野を中心とした先端領域や学際・融合領域における人材育成にも積極的に取り組み、学

部・大学院教育の不断の改善・充実を図る。

- 物質、エネルギー、環境、電気、情報など、社会基盤の基礎となる工学のあらゆる分野における高い研究実績を生かし、グリーン・ライフイノベーションを牽引する世界トップを目指す最先端の研究を一層推進する。
- 水素をはじめとする次世代（再生）エネルギー創製・転換・制御技術、エネルギー・物質循環システムや安全・安心社会システムの構築、コミュニティーも含めた先進的社会情報基盤の技術開発といった相互連関する一連の工学的先端研究を基礎レベルから実用化に至るまで戦略的センター等の設置や産官学の連携を通じて包括的に推進するとともに、省エネルギー、低環境負荷、自然環境と共生する未来型キャンパス作りに取り組む。
- 芸術と工学を設計という創造的なプロセスにおいて融合した我が国トップレベルの拠点として、感性研究、しくみ設計、イノベーション創出の強みと特色を活用し、産業界、学協会、地域自治体等において、デザインに関する学術的な協力について主導的役割を果たす。
- アジア諸国等との歴史的・地理的特性を活用した国際協力を推進し、国際的に活躍する人材育成を推進するとともに、環境・資源・エネルギー・物質材料などの学際理工学研究分野において、アジアを起点とした国際連携の先導的な拠点形成に取り組む。
- 核融合学、新エネルギー力学、炭素資源学、ソフトマテリアル化学、超並列計算機科学の強みと特色を活用して、国内外で活発な共同研究を実施するとともに、その先端研究施設・設備を広く産官学における研究者の共同利用に供し、その社会的役割を果たす。
- あるべき未来都市づくりのために、福岡市をはじめとする自治体等と連携し、伊都新キャンパス地域を実証実験の場として位置付け、有機ELなど新産業の創出に資する革新的物質・材料の創製・評価・活用に取り組む。
- 受託研究・共同研究を数多く受け入れてきた実績を生かし、今後とも我が国の産業を支える実践的な研究等の取組を一層推進するとともに、産官学の積極的な連携の環境を整え、我が国の発展に貢

	<p>献する。</p> <p>○ 工学のあらゆる分野において、社会人博士の受け入れや寄附講座をはじめとする社会貢献活動など、産業界の人材育成ニーズを反映したこれまでの取組実績を生かし、国や地域の産業の振興、持続的発展、知識基盤社会の推進に寄与する。</p>
--	--